

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

49

降ろしてもらおう予定のS町の交差点が近づいてくるにつれ、優子の悲しみと胸に広がる切なさは強くなっていた。

「和樹さん、今日は楽しいドライブを本当にありがとう。わたし、私、本当に嬉しかった。」

「ああ、僕もだよ、優子。こんなに楽しいドライブはじめてだよ。ね、よかつたら、また行こうよ。」そう言うと、和樹は一瞬だけ優子の方を向いてウインクをした。

「うん！ぜひ行きたい！また来週の火曜日でも。」

「OK！また計画しようか！」

「K町の交差点は、あの信号の先あたりでいいの？」

「うん、大丈夫、ありがとう。」

和樹が指定された位置に滑らかに車を停めると、優子は大きなため息を二つ吐いた。

「じゃあ、降りるね。ありがとう、和樹さん。」

そう言うと、優子は下を向いて黙り込んだ。

見ると、優子の目から涙があふれそうになっている。

「ほら、優子、そんな顔をしないで。また、会えるよ。笑って。」そう言って、左手で優子の頭をくしゃくしゃと撫でた。

ポロリと大粒の涙が一粒優子の頬を流れ落ちると、優子は慌てて助手席のドアを開けると、外に降り立った。

「和樹さん、ありがとう。おやすみなさい。」

「おやすみ、優子。気をつけて帰ってね。心配だから着いたら教えて。」

「うん、ありがとう。おやすみなさい。」優子は消え入るような声で言うと、車をあとにした。

(続く)